

ソルブの民話(一)

パウル・ネド 編
大野 寿子 訳

第一部 動物メルヘン

一 オオカミの不運な魚釣り

それからオオカミとキツネは、夕方またぶらぶらと出かけた。とても寒かった。

「上等な毛皮を着てるほくでも寒くて寒くて」とキツネが言った。

「いつか聞いたっけなあ、若いねえちゃん達のそばだと暖かいらしいぜ。だからさあ、紡ぎ部屋にでも行っちゃおうぜ」とオオカミが言った。

「ほくならかまわないよ」

二匹は紡ぎ部屋に着いた。オオカミは娘達にやたらな

れなれしくしはじめたが、キツネの方はストーブのそばでくつろいでいた。キツネは腹が減り、なにかうまいものが食べたくてたまらなくなった。それでウロウロしはじめた。しかしなにもかぎつけることができなかった。そこでキツネは舟遊びをしようと外へ出た。そこへちょうど男が一人、ニシンを積んだ荷車で通りかかった。キツネは車の上に跳びあがり、樽の一つをこじ開け、中からニシンをこっそり取り出しほおり投げた。それから自分も跳びおり、そのニシンをかたっぱしから平らげたので、とうとう残りが一匹となってしまった。

さて、キツネが最後のニシンに今にも噛りつこうとしてたとき、オオカミがやってきた。

「なに食べてんだ？」

「魚さ。味見してみるかい？」
キツネはこう言つて、半身のニシンをオオカミに渡した。とてもおいしかった。

「こんな魚どこで捕まえたんだい？」

「この池さ」

「おれもそいつを捕まえたいなあ」

「だつたらしつぽを水の中にたらしめてみたまえ」

そのころちようど寒くなりはじめた。顔も手足もみるみる真つ赤になつていった。それからすこしたつて、オオカミはしつぽを引きあげようとした。しかしキツネがこう言つた。

「重いかどうか確かめてみたまえ！」

「何も感じないよ」

「じゃあまだ早すぎるんだ」

それからかなりたつて、オオカミはしつぽをまた引きあげようとした。しかしキツネがこう言つた。

「重いかどうか確かめてみたまえ！」

「どうもなにか、かかつたような感じだよ」

「やつぱりまだ早すぎるんだよ。そいつは小魚さ」

〔L・ハウプト/J・E・シュマラー『高地ラウジッツと低地ラウジッツのソルブ民謡』第二巻一六六頁七番〕

二 a 殴られた方が殴られなかった方を背負う

すごくいい天気だった。月が白く輝いていた。キツネとオオカミが冒険の旅に出かけた。二匹は小さな泉のところにやつてきた。

「あれはなんだろう？」オオカミが言つた。

「いったいどこさ？」

「この泉の中だよ」

それは泉の中に美しい影をおとしている月のことだった。しかも満月だった。

「あれはチーズケーキさ」とキツネが言つた。

「ぼくはチーズケーキにはもう目がないんだ」とオオカミが言つた。

「ぼくはチーズケーキなんか食べたくないな。雪玉草の実^註をたらふく食べたからね」

だが、しつぽはかなり凍りついていた。長い時間がたつて、オオカミはまたまたしつぽを引きあげようとした。しかしキツネがこう言つた。

「重いかどうか確かめてみたまえ！」

「すごくでっかい魚がかかつたような気がするよ」

だが、しつぽはもうすっかり凍りついてしまつていた。

「引いてみたまえ！」とキツネが言つた。

オオカミはしつぽを引くには引けた。しかし引きあげることはできなかった。

「ふんばれ、さあふんばれてば。ぼくは溝におつちたときなんか、上へあがろうとふんばらなくつちやなんなかつたんだから」

キツネはそう言うと、オオカミを置いてきぼりにしてさつさと去つていった。オオカミの方はというと、引いて、引いて、引つぱつて、引つぱつて、とうとうしつぽが引きちぎれてしまつた。オオカミはカンカンに怒つた。いつか仕返ししてやろう思うようになった。

というわけで、オオカミとキツネは仇どうしになつたんだとき。

「あのチーズケーキ、食つてみたいなあ」

「だつたら泉の水を飲み干せばいいのさ」

するとオオカミは水を飲みはじめた。その間にキツネは、オオカミの尻にすばやく栓をした。オオカミは泉の水を底まで全部飲み干した。しかしそこにはチーズケーキはなかつた。二匹はこう言い合つた。

「ケーキは、きつとだれかがとつちやつたのかもしれないな」

それから二匹は紡ぎ部屋に行った。そこには若者達もやつてきていた。彼らは「糸紡ぎの夕べ」のパーティをすることにした。その部屋の納戸に上等のソーセージがあるのをキツネが嗅ぎつけた。

「ぼくはソーセージにはもう目がないんだ。ああ、あのソーセージが食べたいなあ！」とキツネは密かに思った。

ところが納戸の前には、キツネの昔からの仇であるばかでかいイヌが、鎖につながれねそべつていた。イヌは扉の前から動かなかつた。そこでキツネは、オオカミにしていた栓を抜き取つた。部屋中が水浸しになつた。水嵩はだんだんと増してゆき、椅子の上に逃げのぼらなけ

らばならない程になった。

ところでキツネはいえ、ソーセージに飛びつきそれをむさぼり食っていた。しかし部屋の中では、人間達がお互いに愚痴を言ったり、オオカミを罵ったりしはじめ、とうとうオオカミとの殴り合いになってしまった。彼らはオオカミをこっぴどく殴りつけ、あげくの果てに外に放り出したので、オオカミはゴミの上のびてしまつた。

さてキツネは、その間にソーセージをすっかり平らげていた。腹ははちきれそうな程パンパンで、もう歩くこともできなかつた。ソーセージのそばにはコケモモの実があつた。キツネはそれを体中にベタベタ塗りたくつた。するとまるで血にまみれたように見えた。

オオカミはひどいうめき声をあげ、人間どもにどんなことをされたかキツネに嘆き訴えた。そして立ちあがり、うろつきはじめた。

「あいつたたたっ！ぼくの方なんて、もっともつとひどいもんだつたよ。どうやって家に帰れつて言うんだ。血だらけなの、わかるだろう？」

たもやとても小さな声でこうささやいた。

「殴られた方が殴られなかつた方を背負つてる！」

しかし今度ばかりはオオカミにもその言葉の意味がわかつてしまつた。オオカミはものすごく腹をたてた。そのときちょうど小さな橋の上にさしかかつたので、オオカミはキツネを下の濠の中へ投げ込んで、自分だけさつさと帰つていった。

というわけで、今度はキツネの方がカンカンに怒つてしまつたんだとさ。

(L・ハウプト/J・E・シュマーラー『高地ラウジッツと低地ラウジッツのソルフ民謡』第二卷一六四頁六番)

注一 Kalinkenbeeren Ⅱ セイヨウカンボクの実、一般的には「雪

玉草」(Schneehalm)と呼ばれている。

二 b キツネとオオカミは仲間どうし

あるとき、キツネとオオカミが結婚式に招待された。

キツネはそう言つて立ちあがると、何度も何度も倒れこんだ。

「ねえ、オオカミさん、どうかお願いだからばくを背負つて家まで連れてつておくれよ！」

オオカミはキツネを背負つた。さて二匹が少し先へとやつてくると、キツネが小声でこう言つた。

「殴られた方が殴られなかつた方を背負つてる！」

「なにを小声でこそ言つてんだ？」

「えつ、知らない！痛くつて辛くつて、はずみでついなんか言つちやつたのかもね」とキツネが言つた。

それからオオカミはキツネを背負つてさらに歩いた。

そしてまた少し先までやつてくると、キツネが小声でこう言つた。

「殴られた方が殴られなかつた方を背負つてる！」

「なにをこそ言つてるんだ？」

「えつ、知らない！痛くつて辛くつて、はずみでついなんか言つちやつたのかもね」とキツネが言つた。

それからオオカミはキツネを背負つてさらにさらに歩いた。二匹がまた少し先までやつてくると、キツネがま

もう晩も遅くなつて二匹は出かけた。しばらく行くと泉があつた。キツネはその泉のところに飛んで行つて水を

飲もうとした。喉がカラカラに渴いていたからである。

ちょうど飲みはじめようとしたとき、泉の中に射し込んでいる月の影に気づいた。

「ああ、なんだいこれは？オオカミさん、ちよつときて見てみなよ。泉の中になにかあるよ。」

オオカミは近寄つてのぞき込んだ。そしてそれがなんなのか言い当てはじめた。

「これはチーズケーキ」とキツネが言つた。

「なるほどね。でも、あれつてどうやつたら引っぱり出せるんだい？」

「いいかい、オオカミさん、泉の水を飲み干しちゃいなよ。それからチーズケーキをとつていこうじゃないか。」

そこでオオカミは泉の水をガブガブ飲みはじめ、お腹がもうパンパンになつた。しかし水はまだまだ減りはしなかつた。二匹は泉をそのままにしておいて、結婚式へと道をどんどん進んでいった。二匹がもう長いこと歩いたとき、キツネがオオカミにこう尋ねた。

「ぼく達のうち、いったいどつちがあまったと馳走を家に運ぶんだい？ぼく？それともきみ？」

「おれはいやだよ」とオオカミが答えた。

「いいかい、オオカミさん、ぼく達のど馳走をいっしょくたにしないようにしようじゃないか。それぞれが自分の分を別々にとらなきゃいけないんだよ。もし『キツネさん、これはあなたの分ですよ』って言われたら、それはぼくの分なんだ。そして、『キツネさん、これはあなたの達の分ですよ』って言われたら、それはきみのものなのさ」

「かまわないよ、おれはそれで十分さ」とオオカミは答えた。

そうこうしているうちに、二匹は結婚式をする家に到着した。キツネはテーブルについていた。だがオオカミはテーブルには近づけなかった。醜くて、毛むくじやらだつたからである。だからオオカミは、テーブルの下のキツネの足元に腰をおろした。食事がはじまり、みんなが料理を皿にとりわけはじめた。

「これはあなたの分ですよ。これもです。キツネさん、

ぼりしてキツネに追いついた。二匹は親しい言葉を二三かわして、仲よくいっしょに家へと向かった。途中でキツネがこう言った。

「ああ、オオカミさん、ぼくはとても疲れていて体の調子が悪いんだ。ほんのちよつとでいいから背負っておくれよ」

オオカミはキツネをつかんで背中にのせた。オオカミがキツネを背負ったとき、キツネはニヤツと笑い、なにげなく小声でささやいた。

「殴られた方が殴らなかつた方を背負ってる」

しかしオオカミには、これがかすかに聞こえていた。そこで尋ねた。

「きみはまたいつたい、なにをひとりでブツブツ言ってるんだい？」

「なににも、べつに、オオカミさん。ただ、きみが泉の中のチーズにありつけなくて残念だったなあと、ただそれだけさ」

（『ラウジツツ、娯楽と教訓（月刊誌）』一八九一年二十一号）

これはあなたの分ですよ」

こんな調子で料理がつきつきと運ばれてきた。そのうち、なにか量の少ないもの、ぱつとしないものがくると、給仕はこう言った。

「キツネさん、これはあなた達の分ですよ」

するとキツネは、それをテーブルの下のオオカミにおしつめた。オオカミは待ちくたびれて腹をたてていた。

辛抱できなくなつて、ブウブウ不平を鳴らし、荒い鼻息をたてはじめていたのである。

するとほかの客達が棒をとり、オオカミをさんざんぶちのめし、外へとおっほりだした。オオカミは、恐くてたまらくなり納屋へと逃げ込んだ。大勢の人達が追つかけてきた。オオカミは納屋の梁に飛びあがった。今度はみんな棒でつついた。オオカミはもうダメだと思い、あまりの恐さに、飲んでた水を下からジョバーツと出しはじめた。下にいたみんなはとうとう溺れ死んだ。そうこうしているうちにキツネはとうとう、さんざん飲み食いしてから上着を着て、身を引きずるようにして帰りはじめた。オオカミの方はお腹をすかし、たたかれ、しょん

三 キツネとオオカミ

むかし、キツネとオオカミが小さな家にいっしょに住み、いっしょに盗みに出かけた。あるとき二匹は蜂蜜の入った壺をひとつ家に持ち帰り、それを納戸に隠した。それから二匹はひとねむりした。オオカミはストープと壁の間の隠れ場所に、キツネはストープの前の腰かけに。キツネは蜂蜜がなめたくてたまらなくなり、しつぽでタイル製の壺をコンコンたたいた。それをオオカミが聞きつけこう言った。

「ねえキツネくん、ドアを開けに行きなよ。だれか来たみたいだよ！」

キツネは行って蜂蜜をなめだした。口のまわりを舌できれいにぬぐってから戻ってきた。オオカミはワクワクくして尋ねた。

「いったいだれが来てたんだい？」

「いやね、名づけ親を頼まれちゃってさ！」

「で、その子になんて名をつけたんだい？」

「なめかけ！」

キツネはまたゴロツとねころんだが、まもなくまた壺をコンコンたたきはじめた。オオカミは命令口調でこう言った。

「キツネくん、ドアを開けに行ってくれ。だれかがノックしてるぜ！」

キツネは行って、壺を半分までなめた。部屋に戻つてくると、オオカミはワクワクして尋ねた。

「いったいだれが来てたんだい？」

「いやね、また名づけ親を頼まれちゃってさ！」

「で、その子になんで名をつけたんだい？」

「半なめ！」

キツネは横になったが、またもやすぐに壺をコンコンたたいた。オオカミが命令口調でこう言った。

「キツネくん、だれかがノックしてるだろ。開けてきな！」

キツネは行って蜂蜜を底までなめつくし、おまけに壺まできれいにペロペロなめた。そして自分のアレをその中にたれた。キツネが部屋に戻つてくると、オオカミがこう尋ねた。

「いったいだれが来てたんだい？」

「いやね、またまた名づけ親を頼まれちゃってさ！」

「で、その子になんで名をつけたんだい？」

「なめつくし・美味・塗つたくり！」

キツネはまた椅子の上になころがった。しばらくしてオオカミにこう言った。

「オオカミさん、蜂蜜はいたみやすいって言うからね。

ぼく達の蜂蜜にもやっぱり気をつけておかないとね」

二匹は蜂蜜の壺を調べに行つた。ところが中には糞しか入っていなかった。それで二匹は、だれが蜂蜜を平らげたのかと口げんかをしはじめた。さいごにキツネがこう言った。

「じゃあふたりともテストしてみなきやな。日なたにねころがろうぜ。尻から蜂蜜が溶け出てきた方が、真正正銘蜂蜜を平らげた犯人さ」

二匹は庭で横になった。オオカミはまもなくねむり込み、ものすごいびきをかいた。ところでキツネの尻からは蜂蜜がジョバツと溶け出てきた。キツネは急いで起きあがり、その蜂蜜をオオカミの尻に塗りつけた。そ

してオオカミをたたき起こしてこう叫んだ。

「これはまた、ぶつたまげた！蜂蜜を平らげたのはきみだったんだ。きみの尻からどんどん溶け出てきてるじゃないか！」

（『ラウジツツ、娯楽と教訓（月刊誌）一八八六年七月号』）

四 a クマ、イノシシ、オオカミがイヌ、ウサギ、ネコと戦う

むかし、クマ、イノシシ、オオカミが、イヌ、ウサギ、ネコと戦おうとした。戦いの場に森が選ばれた。しかし、そこにイヌ、ウサギ、ネコがなかなか現われなかったのので、イノシシは藁山の中へと這い込み、クマは藁山からそう遠くない所に立っている木にのぼって見張りをし、オオカミはその木の下にねころがった。しばらくして敵がやってくるのがクマの目にはいった。そこでクマは両戦友に大声で言った。

「見ろ、見ろ、しみつたれしらみどもがやってくるぞ！」

しかし敵達がずいぶん長いこと到着せず、それどころか彼らの影も形も見えなくなつたので、クマとイノシシとオオカミはすっかり油断していねむりしてしまつた。その間に、敵達は三匹のもとにやってきた。イノシシは藁の中に丸ごとうずもれていたが、片方の耳だけがチラツとのぞいていた。ハエや力がその耳にとまつて刺した。それでイノシシは耳をピクピク動かした。ネコはそれがネズミだと思つて、その耳めがけて飛びかかり、爪をたてかじりついた。イノシシはものすごくびっくりして高く飛びあがり、ギーギーないて逃げ去つた。こんなことになるなんて思つてもみなかったネコは、おなじくらいびっくりした。そのときオオカミも、ネコを追いかけ食いつこうとしたので、ネコは恐ろしさのあまりそばの木へと飛びあがつた。そこにはクマが腰かけていた。イノシシがウサギに追いかけてられているの上からながめていたクマは、ネコと面突き合わせ、びっくりして木からおち、木の下にいたオオカミにぶちあたつて逃げだした。するとそのクマを、イヌもが吠えたと森へと追いやつた。クマの後をネコが追いかけて、イノシシの後をウ

サギが追いかけ、両方が両方ともを森へと追いやった。そうこうしているうちに、木の下のオオカミがイヌにのみ殺されたんだとき。

『ラウジツツ、娯楽と教訓（月刊誌）一九二七年十九号』

四b オオカミとキツネの戦い

ブリエシユコ村で、バルドーニヤ一家が年寄りネコを、ナジャラック一家が年寄りイヌを飼っていた。バルドーニヤおやじが妻にこう言った。

「おれ達はなんだったあのネコと、いつまでもいつしよに暮らさなきゃならないんだ？あいつときたら、もう一匹のネズミだって捕りやしない。いいか、おれはあいつを溺れ死にさせるからな」

「やっぱりそんなことしちやだめよ。あのこはまだまだネズミが捕れるわよ」と妻が言った。

「くだらんことを！あいつの上ではネズミだって踊ることができさ。それでもあいつときたら、なんにも捕るこ

うとはしないのさ。いいか、今度あいつを見つけたら、水の中にぶち込んでやるからな」

バルドーニヤのおかみさんは、ネコがとてもかわいいそうではなかった。ネコはといえば、ストーブの後にねそべって一部始終を聞いてしまい、とても悲しくなった。バルドーニヤおやじは原っぱへと出かけた。そこでネコは起き上がり、とても痛々しくニヤオーツとないた。すると、バルドーニヤのおかみさんは、急いでネコのために扉を開けてやりこう言った。

「お逃げなさい。かわいそうに。亭主が帰って来ないうちにね」

ネコは頭を低くたれて、小さなマツ林の中へと駆けて行った。バルドーニヤおやじが帰宅したとき、おかみさんが言った。

「あのこ、逃げ出しちゃったのよ。」

「運のいい奴め！」と夫が言った。

「ああ、かわいそうなネコちゃん！」

ナジャラックおやじが妻にこう言った。

ちにね」

イヌは尻尾をたらしして小さなマツ林の中へと駆けて行った。ナジャラックおやじが帰宅したときおかみさんが言った。

「あのこ、逃げ出しちゃったのよ」

「運のいい奴め！」と夫が言った。

「ああ、かわいそうなワンちゃん！」

ネコとイヌはマツ林の中で会うこととなった。この二匹は、ブリエシユコ村にいたときはいい友達ではなかったが、このマツ林ではちがってた。

ネズの茂みに 身をよせて

互いの苦境を 嘆きあう

そんな二匹のところにキツネがやってきた。

「きみ達、なんだったここに座ってそんなに愚痴こぼしてるんだい？」とキツネが言った。

「ぼくはね、これまでネズミをたくさん捕まえてきたん

「おれ達はなんだったあのイヌと、いつまでもいつしよに暮らさなきゃならないんだ？あいつときたら、もうすつかり耳も遠くなり目もかすんで、余計なときにほえやがる。そのくせ、ほえなきゃならないときはほえやしない。いいか、おれはあいつを縛り首にするからな」

「やっぱりそんなことしちやだめよ。あのこはそんなに役立たずじゃないわよ」と妻が言った。

「くだらんことを！いまに家中泥棒だらけになっちまうぞ。なのにあいつときたら、それでもだんまりだろうよ。

いいか、今度あいつを見つけたら、あいつももうおしまいだからな」

ナジャラックのおかみさんは、イヌがとてもかわいそうではなかった。イヌはといえば、隅っこにねそべって一部始終を聞いてしまって、とても悲しくなった。ナジャラックおやじは原っぱへと出かけた。そこでイヌは起き上がり、とても痛々しくワオーンとほえた。すると、ナジャラックのおかみさんは、急いでイヌのために扉を開けてやりこう言った。

「お逃げなさい。かわいそうに。亭主が帰って来ないう

だ。なのに今は老いぼれたからって、溺れ死にさせようとするんだよ」とネコが言った。

「ぼくはね、これまでいく夜となくねずの番をしてきたんだ。なのに今は老いぼれたからって、縛り首にしようとするんだよ」とイヌが言った。

キツネはこう言った。

「きみ達って、ちょうど領主の召使いみたいなもんだね。でもきみ達がもう一度お勤めができるように、ぼくが一肌脱いでやるよ。だけどきみ達の方も、ぼくのやることをひとつ手伝ってくれたまえ」

「いいとも」とイヌとネコは言った。

キツネは続けた。

「オオカミがね、ぼくに宣戦布告したんだよ。あいつはクマやイノシシといっしょになってぼくを仇扱いしてやる。だから奴らとは、明日にでも大々的に一戦まじえるつもりなのさ」

「ぼく達もきみといっしょに戦場へおもむこうじゃないか。マツ林の中でくたばるよりも、敵の前で自分の命を断つ方があつぱれつてもんだろ！」

「奴らが着くまでにはあと半日はかかるだろうよ。この枝の上にもねそべっているとするか！」

オオカミはカシの木影にねころがり、イノシシは藁山の中にもぐり込み、片方の耳のさきつちよだけが顔をのぞかせていた。

そこにキツネとネコとイヌがやってきた。ついさつきサシバエに刺されたばかりのイノシシの耳が、ネコの目にとまった。イノシシが耳をピクツと動かした。そのときネコは、その耳めがけて飛びかかった。イノシシはとでもびっくりした。ブヒーツとないて逃げ出した。しかしネコの方はもつとびっくりした。一度ベツと唾を吐きかけカシの木に這いあがり、みごとにクマと鉢合わせをした。だれよりもびっくりしたのはクマだった。プオオツとうなつてカシの木から飛びおり、オオカミの真上におっこちた。オオカミはクマに押しつぶされて死んでしまった。クマはスタコラサッサと逃げ去った。

戦に勝つて ぶじ帰還

歓喜の歌に 酔いしれる

そう言うてイヌとネコは助力を誓った。キツネはオオカミに、戦いの場所を指示する遣いを送った。

さて、三匹は戦場におもむいた。オオカミとクマとイノシシの方が先に到着していた。そして三匹の到着をまだかまだかと長いこと待っていた。だがキツネとネコとイヌはなかなかやって来なかった。

「俺はちよいとこのカシの木にのぼるからな。ひよつとしたら奴らがどこにいるか見つかるかもしれないしな」

クマはそう言うて、まずあたりを見わたした。

「どこにも見えないな」

クマはもう一度あたりを見わたした。

「まだどこにも見えないな」

クマは三度目にあたりを見わたして言った。

「見てみるよ。ずつとむこうからしみつたれいらみどもがやってくるぞ。あれ、一匹、すげえ槍をもってやがるぞ」

しかしそれは、ピンツと立てたしつぽを振りまわしているネコだった。三匹はそれを物笑いの種にした。

とても暑かった。クマがこう言った

帰る途中、キツネは三十匹のネズミを捕まえた。キツネ、ネコ、イヌの三匹はブリエシュコの村はずれまでやってきた。もう真つ暗だった。キツネはネズミをバルドーニヤ家のパン焼き窯の上に置き、ネコに向かつてこう言った。

「さあ、ネズミを一匹ずつどんどん運んでいきなよ」

「わかったよ」とネコは言うて、ネズミを一匹ずつ運んでいった。それを見て、バルドーニヤのおかみさんが夫に言った。

「ちよつと、ごらんさいよ。わたし達のネコちゃんが戻ってきてるわ。そしてネズミをどんどん運んでるじゃないの」

すると、バルドーニヤおやじはこう言った。

「こんな老いぼれネコがまだネズミを捕まえようなんて、思つてもみなかったよ」

「ほうらごらん！私がいっつも言うてたでしょ。わたし達のネコちゃんは立派なネコちゃんだってね。男つて、いっただつて自分の方が正しいと思つてるんだから」

それからキツネとイヌはナジャラック家へ行った。ナジャラック家では、その日ブタをつぶしていた。キツネはイヌにこう言った。

「さあ、自分の小屋へ戻りなよ。そしてすこしたったら、思いつきりほえるんだよ」

「わかったよ」とイヌは言つて、おもいつきりほえはじめた。その声を最初に聞きつけたナジャラックのおかみさんが夫に言った。

「ちよつと、ごらんなさいよ。わたし達のワンちゃんに戻つてきてるわ。そして思いつきりほえてるじゃないの。ねえ起きて。貯蔵小屋をのぞいてみてよ。ひよつとしたらだれかが、ソーセージを盗みにきたのかもしれないわよ」

「耳の遠いあの野郎のことだ。むやみやたらにほえてるだけさ」

ナジャラックおやじはこう言つて、起きようとはしなかつた。

次の日の朝、ナジャラック夫人はヴィティヒエナウの教会に出かけるとき、ヴィチャスおばさんにソーセージ

を少し持つて行こうと思つた。そして、貯蔵小屋にとりに行つたとき、ソーセージが全部なくなっているのに気がついた。血入りソーセージも、ひき割り麦入りソーセージも……戸の敷居の下には、大きな穴が掘られていた。

「なんてことかしら！ やつぱり泥棒が入つてたんだわ。あなた！ とにかくちよつと来てごらんなさい。ああ、やつぱり昨日あなたが起きてさえくれてたら！ もうソーセージなんて影も形もありません。血入りソーセージも、ひき割り麦入りソーセージも……」と妻が大声で叫んだ。

ナジャラックおやじは頭をかいてこう言つた。

「こんな老いばれイヌにまだ見張りができようなんて、思つてもみなかつたよ」

「ほうらごらん！ 私がいつも言つてたでしょ。わたし達のワンちゃんは立派なワンちゃんだつてね。男つて、いづだつて自分の方が正しいと思つてるんだから」

ソーセージを全部引きずつて、持つてつてしまつたのは、もちろんキツネだつたとさ。

(L・ハウプト/J・E・シュマラー『高地ラウジッツと低

地ラウジッツのソルブ民謡』第二巻一六七頁八番)

五 ネズミ

ネズミ達が集会を開いた。どうやつてネコ達から身を守つていこうか？ どうやつたらネコ達が、自分達をひつつかまえないしならないようになるだろうか？ こうしてネズミ達が話し合つて考えたことは、ネコ達の口に口輪をはめることだつた。さあ、それからネズミ達は家に帰つた。するとそこに病気の足萎えネコが一匹やつてきて、ネズミ達に尋ねた。なにしてたんだい？ なにを考えたしたんだい？ ネズミ達はこう言つた。

「こういうことになりました。ネコさん達のお口には口輪をはさせていただきます」

すると足萎えネコはこう言つた。

「で、その口輪の最初の犠牲者はだれになるんだろうね？ ぼくはならないだろうけど」

ネコというものは、ネズミ達が自分に口輪をはめよう

とすれば、やつぱりひつつかまえてしまふのだから。

(W・フォン・シューレンブルク『ヴェントの民間伝説と習慣』シユプラーの森から』二九一頁)

六 雄ネコとネズミ達

われらがネコくんがネズミを捕りに納屋へ行き、そのとおりに一匹捕まつてしまつた。ネズミちゃんがお願いをした。

「ネコさん、ネコさん、どうか食べないで下さい。あなたにお話をしてさしあげますから。」

「じゃあ話してみな」とネコくんは言つた。

ネズミちゃんは話しはじめた。

「むかしむかし、あるひとがお家を建てました。それはそれは大きなお屋敷で、そのひとはきれいにそこをお掃除しました。そしてグロッシェン銀貨を一枚見つけて大金持ちになりました。さつそく肉を買つて食べました」

「じゃあ、おれもおまえを食べなげやな」

ネコくんはこう言つて、あらあらネズミちゃんをムシヤムシヤ食べちゃつた。

『ラウジツツ人、娯楽と教訓（月刊誌）』一八七二年四六号

七 オオカミの幸運な日

ある朝のことだった。オオカミがねぐらで思いっきり伸びをした。太陽がオオカミの体に光をそそいでいた。そこにちよどキツネが通りかかつてこう言つた。

「きみは今日、絶対に幸運にめぐまれるさ。」

「なぜだい？」とオオカミが言つた。

「だつてきみが伸びをしたとき、太陽がきみの体に光をそそいでたからね」

「今日はお出かけるつもりなんてなかったけど、そういうことならひとつ出かけてみるとするか」

オオカミは森の中を通つて行こうとした。そこで二人の泥棒にであつた。泥棒たちはベーコンの束を一つずつ背負つていた。しかしオオカミをみつけると、そのベー

コンを投げ出して逃げていった。オオカミはベーコンをクンクン嗅いでこう言つた。

「キツネが言つたことはやっぱり当たつてたな。今日は絶対幸運にめぐまれる日なんだ。ほら、おいしそうなベーコンじゃないか！しかし、こんな朝っぱらから、いつたいどのどいつがベーコンなんぞ食おうつていうんだ？そんなことしたら、一日中喉がカラカラになっちゃうじゃないか。」

オオカミはどんどん歩き、ある牧草地にやつてきた。

そこで、一頭の子ウマをつれた雌ウマをみつけた。

「こつちの方がうまそうだ」とオオカミは思い、雌ウマにこう言つた。

「やあウマさん、今日は、おれが絶対幸運にめぐまれる日なんだ。というわけで、これからきみの子供をこちそうになるからな。」

「オオカミさん、あなたさまほどのお偉いお方がわたしのめの子供をご賞味下さるうなんて、有り難いことですしとても光栄に思いますわ。でも、その前に、わたくしのお願いをひとつ聞いては下さらないかしら？わたく

カミは自分に言い聞かせた。

「もしおまえがすばらしい医者なんかじゃなかったら、だれもおまえのことをそんなふうに言うはずがないじゃないか」

オオカミは頭をさわつてみて言つた。

「でも、幸いなことに真つ二つに割れてはないぞ。今日という日はおれが絶対幸運にめぐまれる日だつて、キツネの奴が言つてたなあ。だからきつと、もつといいことがあるさ」

そう言つたとたんオオカミは、自分がずいぶん腹がへつていることに気づいた。そこでオオカミは、速足でどどん駆けつけてゆき、水車のところにやつてきた。そこで、一匹の子ウマをつれた雌ウマをみつけた。

「こいつはすごいぞ！」とオオカミは思い、雌ウマにこう言つた。

「やあ、ウマさん、今日はおれが絶対幸運にめぐまれる日なんだ。というわけで、これからきみのかわいい子供をこちそうになるからな。」

さて、オオカミは気がついて少し良くなると、雌ウマにだまされたことにむしように腹がたつた。しかしオオ

しめの子供をご賞味下さるうなんて、有り難いことですしとても光榮に思いますわ。でも、その前に、ほんのちよつとだけ待つては下さらないかしら？ほら、ごらんなさいな、この子はとても汚くて糞まみれでしょ。これじゃお上品なお方さまにはちよつとふさわしくはございませんことよ。わたくしが、お上品な旦那さまにふさわしいように、この子をそれはきれいに洗つてさしあげますわ」と雌ブタはオオカミに言った。

「上品な旦那さまだつて！ハアン！こつちとらそんなこと全然思つてもみなかったな。だが雌ブタの奴だつて、根柢がないんならそんなことは言わないだろうよ」とオオカミは思った。

オオカミは「洗いなよ！」と言つて岸辺に腰をおろした。雌ブタは子ブタをつれて川に飛び込んで、水車にむかつて泳いだ。そして、あつという間に子ブタもろとも水路の中に消えてしまった。

さて、雌ブタが子ブタともども逃げたことにやつと気づいたオオカミは、雌ブタにだまされたことにむしよ

うに腹がたつた。しかしオオカミは自分に言い聞かせた。「もしおまえがお上品な旦那さまなんかじゃなかったら、だれもおまえのことをそんなふうにするはずがないじゃないか。とはいへ雌ブタは、あの馬鹿な奴はおまえをだましたんだ」

そう言つたとたんオオカミは、もうメチャクチャ腹がすいてきた。

「もうしばらく辛抱してみるか。今日という日はおれが絶対幸運にめぐまれる日だつて、キツネの奴が言つてたしなあ。だからきつと、もつといいことがあるさ」

オオカミはどんどん進み、ある草原へとやつてきた。そこで、二匹の雄ヤギがお互いに角を突き合っているのをみつけた。

「ヤギの肉か？こいつはちよつとそんなに食べる気がしないな。だが飢えてのはやつかないしろものだけ」とオオカミは思い、雄ヤギ達にこう言つた。

「やあ、ヤギくん達、今日はおれが絶対幸運にめぐまれる日なんだ。というわけで、これからきみ達のうちどつちかをごちそうになるからな」

「オオカミさん、あなたさまほどのお偉いお方がわたくしどものどちらかをご賞味下さるうなんて有り難いことですし、とても光榮に思いますよ。でもその前に、ひとつお願いを聞いてはくれませんか？わたくしどもはあなたさまが名のある法学者かどうかがつておりますよ。ところで、わたくしどもはちよつとこの草原をめぐつて、とんでもない裁判を行なつておりますね。相談のつてもらおうとあちこちへと出ましましたが、だれもわたくしどもに正しい解決法を教えてはくれませんでした。本当に申し訳ないんですが、名のある法学者さま、この草原がわたくしどものうちどつちらのものなのか、

決めて下さいませんか？さあ、この草原の真ん中にすわつて下さいまし。わたくしどもはそれぞれ草原の両端にわかれます。はやくあなたさまのそばに参つた方が勝ちというわけです。この草原がいつたいたいどつちらのものなのか、そうやつて死の直前にわかるというわけです」と二匹はオオカミに言つた。

オオカミは、できればこの場で片方を食べてしまいたかつた。だがこう思つた。

「名のある法学者だつて！ハアン！こつちとらそんなこと全然思つてもみなかったな。だがヤギどもだつて、根柢がないんならそんなことは言わないだろうよ」

オオカミは「どれ、走つてみな！」と言つて、草原の真ん中に腰をおろした。ヤギ達が草原の両端でスタートをきりオオカミに全速力でぶつかつたので、オオカミは氣を失つてしまった。そして、二匹は逃げ去つた。

オオカミがしばらくたつて再び元氣をとりもどしたとき、ヤギ達にだまされたことにむしよに腹がたつた。しかしオオカミは自分にこう言い聞かせた。

「もしおまえが名のある法学者なんかじゃなかったら、だれもおまえのことをそんなふうにするはずがないじゃないか」

そう言つたとたん、オオカミは、もうとにかくメチャクチャ腹がすいていることに気づいた。

「もうしばらく辛抱してみるか。今日という日はおれが絶対幸運にめぐまれる日だつて、キツネの奴がいつてたしなあ。だからきつと、もつといいことがあるさ」

そしてオオカミは足を引きずってどんどん歩き、大きな耕作地にやってきた。そこで、ヒツジが柵の中で群れているのを見つけた。ヒツジ飼いのイヌもそばにはいなかった。

「おあつらえむぎだ」とオオカミは思い、ヒツジ達にこう言った。

「やあ、ヒツジさん達、今日はおれが絶対幸運にめぐまれる日なんだ。というわけで、これからきみ達のうち一匹をこちそうになるからな。」

「オオカミさん、あなたさまほどのお偉いお方がわたくしどものひとりをご賞味下さるうなんて、有り難いことですしとても光榮に思いますよ。でもでもその前に、ひとつお願いを聞いてはくれませんか？ わたくしどもはあなたさまが洗練された先唱者かどうか？ わたくしどもはあなただけでわたくしどもはいま、だれが合唱指揮者の役を努めるべきか非常に心を砕いているところなんです。といますもの、いちばん声の美しい雄ヒツジが死んでしまっていますね。わたくしどもは、あちこちへと出歩いて探したんですが、だれも十分美しくは歌えない

オオカミはやつとこのことで逃げ出した。

オオカミはあちこちに怪我をし、ポコポコになぐられた体を茂みの中に横たえ、うめき声をあげた。ヒツジ達にだまされたことにむしように腹がたつた。しかしオオカミは自分にこう言い聞かせた。

「もしおまえが洗練された先唱者なんかじゃあなかったら、だれもおまえのことをそんなふうには言うはずがないじゃないか。ヒツジたちめ、あのとんな畜生どもめ、おれをだましやがったんだ」

オオカミは、もう弱り果てて死にそうだった。

「そうだ、ペーコンがあつたつけ。あれだつて上等な夕飯だぜ」

オオカミはそう言つて十分休息をとつてから、二人の泥棒を追つ払つたところにもどつてきた。だがペーコンはもう、キツネが全部もつていつてしまつてたんだとき。

(J・ハウプトノJ・E・シユマーラー『高地ラウジツツと低地ラウジツツのソルブ民謡』第二巻一六一頁五番)

んですよ。本当に申し訳ないんですが、洗練された先唱者さま！ わたくしどもを窮地から救つては下さいませんか？」とヒツジ達がオオカミに言った。

オオカミはもう餌にかぶりつかんばかりだった。だがこう思った。

「洗練された先唱者だつて！ ハアン！ こつちとらそんなこと全然思つてもみなかったな。だがヒツジどもだつて、根拠がないんならそんなことは言わないだろうよ」

そしてオオカミは「どれ、気をつけて見てな！」と言つて、ヒツジ飼いの小屋にのぼり、拍子をとつている姿がみんなに見えるように片手を大真面目にあちこち振つた。ヒツジ達は声を張り上げメエーメエーなきはじめた。競い合つてますます大声を張りあげ歌つた。そしてオオカミも遠吠えをしたので、村中の人々やイヌが集まつてきた。オオカミがちようど一番きれいな歌を歌つてたとき、だれかが突然オオカミに一発食らわせたので、オオカミは小屋から転げおちた。するとイヌはオオカミに食いつきはじめ、人間達もひどくゴツゴツした棍棒や竿や熊手で、殴つたり蹴つたり突き刺したりしはじめた。オ

八 a オオカミと三匹のヤギ

三匹のヤギが、木の葉をかじりに林の中へとやつてきた。一匹目は一段腹、二匹目は二段腹、三匹目は三段腹だった。一段腹のヤギが最初にお腹いっぱいになり、家に向かった。するとオオカミが道をふさいでねそべつていた。

「とつとと行つちまいな。でなきやおまえを食つちまうぞ！」とオオカミは言った。

「食べないで下さい。二段腹の奴がやつてくるでしょうから、そつちの方がよつぽど腹いっぱいになりますよ」とヤギが言った。

そこへ二段腹のヤギがやつてきた。

「とつとと行つちまいな、でなきやおまえを食つちまうぞ！」とオオカミは言った。

「食べないで下さい。三段腹の奴がやつてくるでしょうから、そつちの方がよつぽど腹いっぱいになりますよ。」とヤギは言った。

それから三段腹のヤギがやつてきた。

「とつと行つちまいな、でなきやおまえを食つちまうぞ！」とおオカミは言った。

しかし、三段腹のヤギはおオカミを一突きしたので、オオカミはへりから溝へと突きおとされた。

〔L・ハウプト/J・E・シュマーラー『高地ラウジッツと低地ラウジッツのソルブ民謡』第二巻一五九頁二番〕

八b オオカミと三匹のヤギ

むかし三匹のヤギが、樹皮や木の葉をかじりに林へとやってきた。一匹目は一段腹、二匹目は二段腹、三匹目は三段腹だった。一段腹のヤギがおオカミにであった。

「ヤギのお嬢ちゃん、どこいくの？」

「木の皮や葉っぱをかじりに林へね」

「おつむの上には何があるの？」

「角ちゃんふたつ」

「お足の間には何があるの？」

「お乳よ」

「さあ、おまえを食べちやおう！バクツ！」

それから二段腹のヤギがやってきた。

「ヤギのお嬢ちゃん、どこいくの？」

「木の皮や葉っぱをかじりに林へね」

「おつむの上には何があるの？」

「角ちゃんふたつ」

「お足の間には何があるの？」

「お乳よ」

「さあ、おまえを食べちやおう！バクツ！」

それから三段腹のヤギがおオカミにであった。オオカミはヤギに乱暴に尋ねた。

「ヤギのねえちゃん、どこいきやがるの？」

「ヤギもおなじように乱暴に答えた。」

「木の皮や葉っぱをかじりに林にだわよ」

「頭の上には何があるの？」

「熊手だわよ」

「足の間には何があるの？」

「棍棒だわよ。」

「おまえの尻ん中で何がうなつてやがるんだ？」

「狼犬がいつぱいよ！」

オオカミはびつくりして逃げ出して、垣根の上に飛びあがり、ぶらさがったまま腹が裂けた。すると二匹のヤギが、腹の中から飛び出してきた。三匹はメエーメエーメエーとないてオオカミをあざけり、ヤギ小屋の我が家へと喜んで帰っていった。

〔『ラウジッツ、娯楽と教導（月刊誌）』一八八六年七月号〕

九 ブタ、ガチヨウ、ヤギとおオカミ

ブタとガチヨウとヤギが、冬を暖かく過ごすためにそれぞれ一軒ずつ家を建てようとした。しかし、とても怠け者のオオカミはなにも建てようとはせず、こう言った。「おれはおまえたちの所に暖まりにくるからな」

ブタは、短冊形の切り芝に穴をほじり開け、その中に入り込んだ。ガチヨウは、羽をむしってその中に入り込

んだ。ヤギは、薪を集めてそれで小さな家を建てた。

まもなくすると寒波が襲ってきた。オオカミはブタの所にやってきてこう言った。

「ブタくん、おとなりさん、入れてくれよ！」

「入れてあげられないよ！」

「おれを入れてくれないのなら、おまえの家をぶっこわしちゃうぞ！」

オオカミはそうさげぶと、体を強くぶつけて家を倒し、ブタを食ってしまった。

オオカミはゆつくり休んでから、ガチヨウの所にやってきてこう言った。

「ガチヨウくん、おとなりさん、入れてくれよ！」

「入れてあげられないよ！」

「おれを入れてくれないのなら、おまえの家をぶっこわしちゃうぞ！」

オオカミはそうさげぶと、体を強くぶつけて家を倒し、ガチヨウを食ってしまった。

オオカミはゆつくり休んでから、ヤギの所にやってきてこう言った。

「ヤギくん、おとなりさん、入れてくれよ！」

「入れてあげられないよ！」

「おれを入れてくれないのなら、おまえの家をぶっこわしちゃうぞ！」

ヤギはオオカミを入れなかった。オオカミは家に体を強くぶつけた。しかし家は倒れなかった。そこでオオカミは、別の手をつかってみようと思つた。

「ヤギくん、おとなりさん、明日はケーニヒスヴァルタで年の市があるよ。行かないかい？」

ヤギはもともと行くつもりだつた。だから翌朝、早起きして出かけ、ヤカンとミルクポットとクリーム用スプーンを買つた。そして帰路についた。

オオカミも急いで年の市へとかけつけた。ヤギはすでに遠くからやってくるオオカミの姿を目にとめ、ヤカンで身姿を覆い隠した。けれども、そこからしつぽがまだのぞいてた。オオカミは走り寄つてきて、クンクン匂いを嗅ぎ、そのしつぽを一かじりした。かじりながらオオカミが言つた。

「かじつちやえ、かじつちやえ、この根っこのおいしい

こと。でもおれは、おまえたちを全部地面から引っこ抜いてる暇はないんだ。年の市にはヤギくんが来ているんでね。そのほうがずうつとおいしいにきまつてる」

オオカミは年の市へと走つて行き、ヤギはヤカンをおこし、ヤカンいっぱい湯をわかつた。

オオカミは、とても腹をすかせて年の市から帰つてきた。ヤギがきていなかったからである。

「ヤギくん、おとなりさん、あけてくれ！」

オオカミはヤギの家に入り込もうとした。

「なんできみは年の市にいなかったのさ？」

「入れるわけにはいかないよ。きみはぼくを食べるつもりだろう」とヤギは言つた。

「食べないよ、食べないよ、ぼくはただ寒いだけなんだ！」とオオカミはさげんだ。

「じゃあ、ちよつと待つてておくれ。ヤカンのお湯がまだ沸いてないんだよ」

オオカミはもうヤギが食いたくて、牙を研いでいた。お湯が沸くと、ヤギはグツグツ煮えたぎつた湯をクリー

【注釈】

一、二、三 キツネとオオカミの話

ソルブの伝承の中でもその原型をよく留めている、オオカミとキツネの共同生活に関するメルヘンをここに集めた。K・クロンは自分の比較研究「クマ（オオカミ）とキツネ、北欧動物メルヘンの一列」（『フィン・ウゴル協会誌』第六巻、一八八九年）の中で、これらのメルヘンの相関性を証明した。総括的な研究としては、

おなじくK・クロンの『若手のメルヘン研究成果概要』（FC九六番一九三一年）十七頁以下を参照のこと。
ボルテ／ポリーフカはKH M（グリム兄弟『子供と家庭のためのメルヘン集』七三番、七四番の注釈の中で、

それに該当するモティーフ群を調査している。（ボルテ／ポリーフカ『グリム子供と家庭のためのメルヘン集』注釈書』全五巻）

一 オオカミの不運な魚釣り

ム用スプーンですくい、ミルクポットにそそいだ。そして扉をひらいてオオカミの顔にその熱湯を浴びせただ、オオカミは歯をむき出し目をぐるぐるまわして倒れ込んだ。ヤギもう一杯ヤカンでお湯を沸かし、オオカミに浴びせかけたので、とうとうオオカミは死んでしまった。ヤギはオオカミの毛皮をはいで、冬のための豪華な毛皮を手に入れたとき。

（M・ナウカ『伝説、メルヘン、物語——ソルブの民族遺産』八頁九番）

このメルヘンは、J・E・シュマーラーが故郷の村口ーザ（ブランデンブルク州ホイアースヴェルダ地方）で採取したのだが、そもそもこのタイプのメルヘンのほとんどがローザで採録されている。ハウプトの『ラウジッツ伝説集』第二巻二〇八頁三二二番、ナウカの『伝説、メルヘン、物語——ソルプの民族遺産』（パウツェン、一九一四年）二八号二〇番に、このタイプのメルヘンが自由に改作されて復刻されている。ポルテノポリーフカの『注釈書』第二巻一一四頁では、本稿を参照するよう指示されている。

ブランデンブルク地方に関しては、ウツカーマルク村のメルヘン「オオカミ釣りをする」が、クーンの著書二九七頁一五番に示されている。その話ではキツネが農夫達を誘い出し、その農夫達がオオカミをさんざんに殴る、となっている。

シュレージエン地方に関してはポイケルトが、類話関係がそれほど明瞭ではないが、二つのヴァリエーション（二頁一番「ライオンとキツネ」、二頁二番「オオカミとキツネ」）を紹介している。両方ともオーバーシュレ

つて、まったく独自の形態であることが実証されている。

とりわけ好んで用いられ、たいへん特徴的である紡ぎ部屋が導入部で用いられることが指摘されよう。クローン（二八八九年三四頁）は、このタイプがすでに十二世紀に文学に現われていることを指摘し、そこから「北欧では少なくとも千年前にもウクマとキツネの民間伝承が存在していた」と推論している（四二頁）。チェコの動物メルヘン集は、残念ながら入手できなかった。

二a 殴られた方が殴られなかった方を背負う

このメルヘンは、シュマーラーが母親から採取したもので、前話と同様ローザ村に由来する。ハウプトの手によって『ラウジッツ伝説集』（ライプツィヒ、一八六二（一八六三年）第二巻二〇七頁三二二番）に収載される。ポルテノポリーフカの『注釈書』の二巻一一八頁にそのことが記されている。フルニツクの『チタンカ』十頁に再び登場し、ナウカの二八頁二十番には改作され、掲載されている。

ージエン地方で採取されている。

ボンメルン地方に関しては、ヤーンの『民間伝説集』五五七番参照。他の地域からの出典は、ポルテノポリーフカの『注釈書』二巻一一一頁以下を参照。

スロヴァキアの伝承には、キツネとオオカミのメルヘンはわずかなしい。ポリーフカの『スロヴァキアの民間メルヘン集』（マルティン、一九二三（一九三二年）第五巻一三九頁に、同じくAT五型のモティーフを組み込んだヴァリエーションが一話紹介されている。

ポーランドのメルヘンに関しては、クジヤノフスキーが、『体系的配列によるポーランドの民間メルヘン』（ワルシャワ、一九四七年）第一巻五三頁で、ここに登場する一連のモティーフを以下の二つのタイプに分類している。すなわち、オオカミがかけつけた人々によって最後に追い払われる、もしくは打ち殺される、の二つである。クジヤノフスキーはこの二つのタイプには全部で三十四のヴァリエーションがポーランドにあることを証拠だてている。

われわれソルプのメルヘンは、これらの比較研究によ

二b キツネとオオカミは仲間どうし

このテキストは、E・ムツケがA・ザイラーの遺稿から得て刊行したもので、それには「この話はザイラーが民衆の口から採録した」と追記されていた。ザイラーは一八三五年から七二年にかけてローザの牧師をしていたので、この話と同じくこの地方から収集されたものであるという推測は自然である。この話はポルテノポリーフカには知られていなかった。プシエジェナツクの一九二二年三五頁に再収、ナウカの二八頁二十番に掲載されている。

二aと二bのメルヘンは、月のチーズ（ケーキ）のモティーフ、キツネを背負うモティーフを共有している。これらのモティーフは、かたや紡ぎ小屋訪問、かたや結婚式の家訪問とに結びついている。

しかし、クーンが二九六頁十四番に挙げている、「オオカミとキツネ、婚礼に招かれる」というブランデンブルクの話には、月のチーズ（ケーキ）とキツネ背負いの

モテイーフはない。ただしキツネを背負うモテイーフだけは、クーンの二九九頁十六番「間抜けなオオカミの話」に登場している。

ボンメルン地方に関しては、ヤーンの手による『民間伝説集』五五八番「キツネとオオカミ、婚礼に招かれる」がある。KHM七四番「キツネと名づけ親おばさん」にも、キツネ背負いのモテイーフがやはり登場するが、形はあまり整っていない。

スロヴァキアのメルヘンでは、キツネ背負いのモテイーフについて、たった二つのヴァリエーションが確認されている（ポリーフカ第五卷一三九頁）が、月のチーズ（ケーキ）のモテイーフは欠けている。これらヴァリエーションの一つでは、オオカミの代わりにクマが登場する。このヴァリエーションには、A T四七A型のモテイーフも登場する。

ポーランドのメルヘンに関しては、クジジャンノフスキーが前掲書第一卷五四頁で、婚礼の家でのキツネとオオカミ、そしてキツネ背負いタイプ話のヴァリエーションを二六話紹介している。ここではふつうキツネが、腹を

れる。このテキストでは、キツネ背負いのモテイーフは希薄である。

三 キツネとオオカミ（蜂蜜の壺）

このメルヘンはE・ムツケが、メルヘンの語り手ハインジャ・クラレッツから聴取したものである。ナウカは、『バラダイス』一九二九年四頁に、「キツネとオオカミとクマ」という開かれたテキストを提供している。そこには、クマが脇役ながら登場し、蜂蜜の壺の代わりにバターのミニ樽が使われている。

ソルブのメルヘンは、KHM二番「ネコとネズミの共同生活」と似通っている。ポルテノポリーフカ第一卷十頁では、ホルシュタイン地方、メクレンブルク地方、そしてドイツ以外のほとんどのテキストにキツネとオオカミが登場すると記している。しかし彼らには、われわれソルブのテキストは知られてはいなかった。

ブランデンブルク地方に関しては、ひとつの資料が存在する。すなわちA・エンゲリエン/W・ラーン『マル

すかせたオオカミを婚礼かもしくは宿屋（料理屋）での談話に招待する。オオカミはその際食べ過ぎて、二度とその部屋から出られずに、打ちのめされるか場合によっては叩き殺される。キツネは、頭にひどい怪我を負っていると言う。キツネ背負いのモテイーフがその後続く。

このa、b双方のソルブ・メルヘンは、具象性とソルブ独自の諸特徴において際立っている。それは、「紡ぎ部屋」、「栓を使った劇的なエピソード」（ポーランドのメルヘンにも存在する。クジジャンノフスキー前掲書第一卷五六頁）、そして「血と見せかけるためのコケモモ果汁の利用」の三点である。K・クローンは前掲書（一八八九年）五四頁以降で、塗り付けて怪我に見せかけるのに、普通はクリームやパン生地（脳味噌が流れだす）が利用されるということを、多くの例によつて裏付けている。漿果汁は、クローンによれば、ソルブ以外ではモラヴィアのメルヘンにおいてのみ見いだされるという。月のチーズ（ケーキ）に関しては、ポルテノポリーフカ『注釈集』第二卷一一六頁を参照のこと。また、二bのメルヘンからは特に、A・ザイラーの詩的創作の跡が見て取

ク・ブランデンブルクの民間伝承の二六六頁十六番「オンドリとメンドリ」では、最初にバター樽のモテイーフが語られている。

スロヴァキアのこのタイプのヴァリエーションは、ポリーフカ前掲書には欠けている。またクジジャンノフスキーも、ポーランドのヴァリエーションを紹介してはいない。

前掲のソルブのテキストは、クローン前掲書七四頁以降におさめられているこのタイプの話とまったく同じである。しかし彼にはソルブのテキストは知られていない。このことから、ソルブのメルヘンの根源が非常に古いことが推測される。クローンは、オオカミのかわりにクマを登場させている。このクマのソルブ語（mjedwiedź）は、文字通り、蜂蜜をたいへん好むことを表している（mjedojty = honigsüß, honigtartig）。

この洗練された表現力豊かな作品とならんでソルブ文学には、この種のメルヘンの豊富なヴァリエーションがある（あまり明確な形ではない）。『ラウジッツ、娯楽と教訓（月刊誌）』一八八三年二四頁には、「殴られた方が

殴らなかつた方を背負う」というタイトルの、ツアイツ近傍ノイエンドルフ村出身のマヤ・シヨムボロイツによつて語られた、低地ソルブ語のテキストが掲載されている。その話は簡条書き形式で、肉用貯蔵庫への侵入のモティーフ(KHM七三番参照)と、顔になにかを塗り付けたリキツネを背負つたりする、ソルブ特有のモティーフとが結び付けられている。また同様のモティーフが、『ヴェンド人のメルヘン、伝説、迷信的風習』(フェツケンシュテット)のブラーニツツ村で採取した動物メルヘンの二番(四二三頁)に、地下室で歌うオオカミのモティーフが挿入された形で報告されている。このモティーフは、ボルテノポリーフカ『注釈書』第二巻一一頁に記されている。本書八番のメルヘンも参照のこと。ボルテノポリーフカ『注釈書』第二巻一一四頁は、さらにフェツケンシュテットの九八頁六番を参照するよう指示している。その話には、オイレンシュピーゲルが不運な魚釣りへの煽動者として登場している。しかし、このフェツケンシュテットのテキストは、信憑性に欠けるように思われる。オイレンシュピーゲル・モティーフと親指

四 a クマ、イノシシ、オオカミがイヌ、ウサギ、ネコと戦う

この家畜と森の動物との戦いについての動物メルヘンは、ソルブの伝承では、一八二七年六月十五日の『ソルブ新聞』第十二号に、H・ザイラーによつて収集されたものが最初である。O・ヴィチャスレーマンは、『ラウジツツ、娯楽と教訓(月刊誌)』一九二七年十九頁にこのテキストを掲載しているが、不完全なものである。従つて編者は彼のテキストに、クリューガーのテキスト『ソルブのなぞなど、諺そしてメルヘン』四七頁三番(『ソルブ新聞』より借用)を参考に加筆した。ここでは家畜の救い手として、通例のニワトリのかわりにウサギが登場する。ヴィチャスレーマンは『ラウジツツ、娯楽と教訓(月刊誌)』一九二七年十九号で、「しみつたれ野郎」(wspikarj)という語が、すでにパウリノシンブフノエレンストの五九五番に登場していることを指摘している。その話では、一人の女性が自分の夫を「しみつたれ野郎」と罵っている。そのことに関してはヴィチャスレ

小僧モティーフとが混同されているからである。

また、『週間新聞』一八四三年一一八頁の「オオカミがどうやって魚をつかまえるか」という話が、ハウプトノシユマラーの『高地ラウジツツと低地ラウジツツのソルブ民謡』(グリーンマ、一八四一、四三年、復刻版一九五三年)第二巻一六六頁(本書第一巻に収録)のテキストの再話であることは確実である。もつとも前者には紡ぎ部屋のモティーフが欠けている。このテキストの改作を、ヨルダンが『低地ソルブの民間メルヘン集』(一八七六年)三四頁で報告している。また、『ラウジツツの人々、娯楽教訓誌』一八六六年一七三頁のメルヘン「オオカミとキツネ」は、KHM七三番の再話である。最後に、ソルブの学生連合「セルボウカ」の機関誌『セルボウカの花』(一九〇〇〜一年)中の「冬、メルヘンがどのように語られるか」という話は、生徒向きに自由に書き換えられた結果、あらゆるモティーフが盛り込まれることとなった。

キツネとオオカミのメルヘンは、今日でもなお一般的に知られており、とくに子供達に愛好されている。

レーマン著『H・ザイラーとその時代』パウツェン、一九五五年、二七一頁も参照のこと。

ボルテノポリーフカ『注釈書』第一巻四二四頁では、KHM四八番に続いて、このタイプが扱われている。このタイプには、ソルブのメルヘンの多くのモティーフが凝縮されている。さらに、家畜動物とオオカミ、イノシシとの戦いに関しては、ボンメルン地方のテキストが挙げられている(『ボンメルン民俗学』第七巻十四頁「動物戦争」)。ポイゲルトはシュレージエン地方のメルヘンを一話挙げている(十一頁十番「イヌとキツネの戦い」を参照のこと)。そこではイヌ、ネコ、ニワトリがキツネたちとの戦いに赴く。ポリーフカ前掲書第五巻一三三頁のスロヴァキアの動物メルヘンのうち、このタイプに属しているのは一話のみである(クマ、イノシシ対ウサギ、ノロジカ、キツネ、ネコの戦い)。ここでは、家畜動物と森の動物との区別が明瞭ではない。クジジャンフスキー第一巻六一頁は、ポーランドの五つのヴァリエーションを挙げている(クマとオオカミ、ライオン、トラ、イノシシ、ネコ、ニワトリ)。クローンの『メルヘ

ン研究成果概要』(FFC第九六号三七頁)も参照のこと。

四b オオカミとキツネの戦い

シュマラーはこのメルヘンを、ケーニックスヴァルタ近傍のコッテン村出身のシヨルツェ夫人から採取した。ハウプトの手により『伝説集』第二卷二〇九頁三―三番に復刻。ボルテノポリーフカ『注釈書』第一卷四二五頁、KHM四八番「老犬ズルトン」の注釈の中に、またグリム『子供と家庭のためのメルヘン集』第三卷(注釈書)八七頁に注記されている。このメルヘンはKHM四八番のヴァリエーションのひとつである。ここでもイヌとオオカミのモテーフが、家畜と野性動物との戦いへと拡大されている。言語的にはこのメルヘンは、多くのソルブ・メルヘンとは反対に、たいへん詳細かつ流暢に形成されている。その語り手は疑いなく才気あふれる快活な女性で、稀に見る現代的な語りの様式で語っている。注目すべきことは、挿入されたリズム的に高められる。

た語り口(脚韻なし)で、そのことをシュマラーは強調したのである。

その他のソルブのテキストは『ラウジッツ、娯楽と教訓(月刊誌)』一八八三年六四号、「オオカミと戦う年寄りイヌ」に見いだされる。『ラウジッツ』一八九〇年十五号、「プリエシユコのメルヘン」は、ここで挙げたテキストの内容希薄な再話である。このメルヘンの再話に関しては、ナウカの九頁九番「イヌがオオカミと戦う」を参照のこと。シュレーンブルクの『低地ラウジッツ報告』一九一八年四八頁一七番、「ハンチャーハンノの伝説」では、シュライフェでのテキスト(シエパードとオオカミ)に、オオカミ、イノシシ、クマ対イヌ、ネコ、ニワトリの戦いが付け加えられている。最後にフエッケンシュテットは、『ヴェント人のメルヘン、伝説、迷信的風習』四二三頁、動物メルヘンの第三番目に、キツネとニワトリがオオカミとイヌのかわりに登場するヴァリエーションを載せている。またそれは、ボルテノポリーフカ『注釈書』第一卷四二六頁にも注記されている。このヴァリエーションは、完全に孤立して存在しているの

で、フエッケンシュテットの全テキストに照らし合わせてみると、その信憑性は薄いと思われる。

隣接する地域の話としては、ポイケルトの『シュレーゲン地方のドイツ・メルヘン』七頁九番に、「イヌとオオカミ」というヴァリエーションが挙げられている。スロヴァキアの動物メルヘンでは、ポリーフカ前掲書第五卷一三二頁にある、類似した二つのテキストがこのタイプに属する。若干のポーランド・メルヘンでは(ケジジャンノフスキー前掲書第一卷六十頁に十一のヴァリエーションをもったこのタイプの話が挙げられている)、イヌがオオカミを家に誘い込み、オオカミはそこで人々に打ち殺されることになる。

五 ネズミたち

この言葉足らずにぎこちなく語られているメルヘンは、ネコに口輪をはめようというネズミたちの決議をおつかっている。このモテーフに関しては、周辺の隣接地域には証拠資料が存在しない。ボルテノポリーフカ『注

釈書』第三卷五五〇頁が、KHM二二三番「なぜイヌたちは互いに嗅ぎ合うのか」への注釈で、これと似たモテーフ、つまりネズミたちがネコに鈴をつけようとするモテーフを示している。出典として彼らは、パウリノシンプフ/エルンストの六三四番、キルヒホーフの『ヴェンドウンムート』七号一〇五番、ハンス・ザックスの『寓話集』第四卷三十頁二五九番、デーネハルトの『自然伝説集』第四卷一四五頁、三〇一頁を挙げている。スロヴァキアとポーランドのメルヘンにはこれに関する資料は存在しない。

六 雄ネコとネズミたち

ドゥッチマンの手により、パウツェン近傍のバザンクヴィッツで採取される。KHM二番「ネコとネズミの共同生活」との関連は容易に見当がつく。しかしこのテキストには、共同の住まいのモテーフと脂壺のモテーフが欠けている。ソルブ・メルヘンでは、キツネとオオカミの話(三番参照)で、蜂蜜壺についてのエピソード

が登場する。ボルテ／ポリーフカ『注釈書』には、このメルヘンは挙げられていない。隣接する地域には、このタイプのヴァリエーションは存在しない。トンブソンはAT一〇一型の注釈で、フィンランド、ノルウェー、デンマークのヴァリエーションを記している。

七 オオカミの幸運な日

シュマラーはこのメルヘンを、ローザ近郊の小さな村であるラーツェンで採取した。ハウプトの『伝説集』第二巻二〇四頁三一〇番に掲載される。

このメルヘンの極めて語調の整った再話を『週間新聞』一八四四年一三三頁が提供している。同じテキストは、ヴィエイエンカが『セルボウカの花』第一八九五年度版に載せ、このメルヘンをチェコの話から翻訳したと明記している。とはいうものの、出典までは記されていない。最終的にこのメルヘンは、ナウカの三七頁二四番に手を加えられない形で挙げられている。

このメルヘンのモチーフにつきを示す。

- A キツネがオオカミに幸運な一日を予告する
- B オオカミが盗んだベーコンを手に入れられない
- C 雌ウマが医療的な助けを請う
- D 雌ブタがまず子ブタを洗いたがる
- E ヤギたちがオオカミの裁定を請う
- F ヒツジたちがオオカミに前唱者としての援助を請う
- G オオカミが手に入れなかったベーコンを、その間にキツネが横取りする

「の類話であると考えられる(ボルテ／ポリーフカ『注釈書』KHM八六番の注釈では、ソルブ・テキストの参照指示はないのだが)。

最後に『ラウジッツ、娯楽と教訓(月刊誌)』一八九一年六三号にJ・ロレンツが報告した「処罰されたオオカミ」の話指摘しておく。この言語表現上ひじょうに貧弱なテキストは、単にモチーフE、Fを並べたものすぎない。ただ、飛び去っていくガチョウが付け加えられている。疲れたオオカミが、ある木の下に腰をおろし、自分の愚かさに対する神の裁きを願う。すると、木の上に逃げのぼっていたきこりの斧がオオカミの頭の上におち、オオカミは死んでしまうのである。

類似のメルヘンとして、クーンは、プロデヴィン(ウツカーマルク)で採取した「おろかなオオカミ」(二二九頁十六番)を挙げている。この話はモチーフBCDEから成り、『ラウジッツ、娯楽と教訓(月刊誌)』一八九一年六三号収載の、ソルブ独特のヴァリエーションと同じ結末を迎える。ツァウネルト『グリム以来のドイツ・メルヘン』第一巻二〇四頁を参照のこと。

シュレージエン地方からは、ポイゲルトが「フルベルクの大食いオオカミの話」(『シュレージエン地方のドイツ・メルヘン』十二頁十一番)を挙げている。それには、モチーフAD(子ブタはまだ命名されていない、オオカミが歌わなければならない)、モチーフE(子ヤギはまだ命名されていない)が含まれている。オオカミは農夫に打ち殺される。

ボルテ／ポリーフカ『注釈書』第二巻二〇六頁のオオカミがヤギやブタにだまされる諸例、同じく三巻七七頁のウマとオオカミ、またクローン、FFC九六号一〇四頁以下などに、その「だまされた悪魔話」との関わりが指摘されている。

スロヴァキアのメルヘンからは、ポリーフカ前掲書五巻一四三頁に、AT一〇二型のモチーフの話から二、三話紹介されている。ポーランド・メルヘンには、この非常に濃縮されたテキストが存在しない。クジジャンノフスキー前掲書第一巻六三頁が、KHM八六番によく似たタイプの二つのヴァリエーションを挙げている。

本書のメルヘンは、しっかりとした構造と、才能あふれ

る語り手（シユマラー）がその名を挙げていない）によつてるほどこされた豊かな言語的装いを有する作品である。

ソルプ・メルヘンに関して、ヴィルヘルム・グリムは『小論文集』第四卷一八八七年三六八頁で、この素材がシユタイン・ヘーフェルの『イソップ物語集』一四八〇年第一版にすでにみいだされることを示している。グリムの見解によれば、そのテクストが民衆の口頭伝承であることはまちがいない。

八 オオカミと三匹のヤギ

このメルヘンのヴァージョンaは、シユマラーがJ・D・ヨルダンから譲り受けたものであるが、ヨルダンは、自分の収集した民謡集をも彼に託していた。ヴァージョンbは、語り手ハンジャ・クラレッツからムツケによつて採取され書式化されたものである。後者は、ナウカが、自ら収集した話に独自の冒頭部と結末部を付け加え、『伝説、メルヘン、物語——ソルプの民族遺産』四

頁四番に収載した。

両テクストとも、「オオカミと子ヤギたち」のタイプに属するKHM五番と比較すると、独特の形態を有することがはっきりする。この特殊な形態をもつたメルヘンは、隣接地域には存在しない。スロヴァキアのヴァリエーション（ポリーフカ前掲書第五卷一三五頁）は、KHM五番に類似している。ポーランドのヴァリエーションは、クジシャノフスキー前掲書には示されていない。

九 イノシシ、ガチョウ、ヤギとオオカミ

ナウカのメルヘン集から取られたこの話のヴァリエーションは、ラウジッツ地方の文献にも、隣接地域の文献にも存在しない。編者はナウカ本人へこの出典を照会した。ヤン・シマツクの手書きの記録から拝借したとの返事であった。これ以上詳しいことはもはや確認できない。だが、このメルヘンが比較的最近になってソルプ・メルヘンに、しかも文献を介して入ってきて、さらにそれがソルプ風に作り直された可能性は高い。この話はナウカ

のメルヘン集を通じてよく知られるようになり、それ以来、特に子供に人気がある。

ボルテノポリーフカ『注釈書』第一卷四〇頁には、家を建てる子ブタの話が、イギリスおよびフランスの資料として載っている。シユネラー（『ヴェルシュティローのメルヘンと伝説』一八六七年）四二番では、三羽のガチョウになつている。ピアリンガー（『わたしを連れていって』一八七一年）二三〇頁のオーバープファルツ地方の話では、ウサギ、ガチョウ、子ブタとなつている。またトンプソンは、AT二二四型の注釈において、イギリスとデンマークのメルヘンをも引き合いに出している。

【解説】

ザクセン州南東部、チエコとの国境に近い山岳地帯を源流とし、ベルリン市内に向かって流れるシュプレー川。その山岳地帯よりベルリンの南南東約五十キロのシュプ

レーヴァルト地帯（Spreewald/Biota）に至るまでの南北約百キロ、この川を中心に東西約五十キロの地域はラウジッツ（Lausitz/Autizca）と呼ばれている。厳密には、ブランドンブルク州南東部の町コトブス（Cottbus/Chocœus）を中心とする低地ラウジッツ、ザクセン州東部の町バウツェン（Bautzen/Budyšin）を中心とする高地ラウジッツの両地域より成り、それぞれ低地ソルプ語（Niederorbisch/Delingserscina）を話す低地ソルプ人、高地ソルプ語（Oberorbisch/Hornjerscina）を話す高地ソルプ人が住んでいる。ソルプ人とは、ゲルマン諸民族の大移動時に現在のドイツ国土の東側約半分の地域に東方から入植してきた西スラブ系スラブ民族の末裔のことである。彼らの名は、歴史的にはむしろヴェント人（Wendisch）の名で知られている。ザクセンシュビーゲルが定められて以来、ヴェント語（ソルプ語）の使用は禁止され、また民族的にも蔑まれた形のまま第二次大戦に至った。しかしながら戦後の旧DDR体制下では一転して国家的優遇措置がとられ、ソルプ語自体も旧東独の公用語として認められ、様々な民族文化組織の活動

が盛んとなった。ところが東西ドイツ統一以降、彼らは政府という財政的な後ろ盾を失う結果となる。また全員がドイツ語とのバイリンガルであるソルブ人の総人口は、現在約七万人を切ったとも言われており、民族文化、そして何より言語そのものをどう保持していくかが今後の課題となっている。

本テキストは、パウル・ネド (Paul Nedo/Pawot Nedo) 氏により編集され、パウツェン所在のソルブ民族研究協会論文集第四巻として、ドモヴィナ出版社 (Domowina Verlag) から刊行された研究書、『ソルブ民間メルヘン—概説と注釈をほどこした体系的文献一覽』(《Sorbische Volksmärchen — Systematische Quellenangabe mit Einführung und Anmerkungen》) である。同書は大きく分けてA、B二つの部門から構成されている。「ソルブの民間メルヘンについて」と題されたA部では、概説、収集研究の歴史、メルヘンの語り手たち、言語的特異性、ソルブ・メルヘンの特徴などについて記され、「メルヘンテキスト」と題されたB部には、ソルブ・メルヘンが

八十六番(それに類話が加わる)まで収録されている。これらの話は、アールネ/トンプソンの『民話のタイプ』(《The Types of the Folktale》, FF74, Helsinki 1978) に基づいて、第一部 動物メルヘン、第二部 魔法メルヘン、第三部 聖人伝風メルヘン、第四部 短篇小説風メルヘン、第五部 おろかな悪魔のメルヘンに分けられている。ここに挙げられたメルヘンは、ネド氏が語り手の話を直接書き起こしたものではないが、彼以前の民間伝承収集研究者たちの手によりソルブの雑誌、新聞等に記載されていた膨大な記録の中から選出、体系化された貴重な研究資料である。この文献集は、同氏の手により十年後の一九六六年、同研究協会著作集三十二巻として刊行される『ソルブ民間文芸概説』(《Grundriss der Sorbischen Volksdichtung》, Bautzen) の先駆けとなり、またソルブ口承文芸研究史上重要な位置を占めるものである。今回は、その第一部動物メルヘン中最初の九話およびその注釈の翻訳を試みた。

【年譜：パウル・ネド】

- 一九〇八年十一月一日
ヴァイセンベルク近傍のコティッツに生まれる。母親は洋裁師、父親は機関車のボイラーマン。
- 一九二二〜二八年
ライプツィッヒ大学で教育学と民俗学を専攻。
- 一九三二〜三七年
高地ラウジッツで様々な教職につく。
- 一九三三年
組合連合組織「ドモヴィナ」の委員長に選出される。
- 一九三七年
ナチスが「ドモヴィナ」の活動を禁止する。
それに伴い免職、ラウジッツからの追放処分を受け
る。
- 一九三七〜四五年
ベルリンで職を転々とする。兵役。
- 一九三九、四四年と二度にわたり逮捕される。
- 一九四五〜五〇年

「ドモヴィナ」の委員長、パウツェン北部区域の督学官、ソルブ文化・国民教育局長に就任。

- 一九五一〜五二年
ザクセンの国民教育省の芸術文化部門長官に就任。
- 一九五二〜六一年
ライプツィッヒ素人芸術中央院の学術長に就任。
- 一九五五年
『ソルブ民間メルヘン—概説と注釈をほどこした体系的文献一覽—』(ソルブ民族研究協会論文集第四巻、パウツェン、ドモヴィナ出版社) により博士号取得。
- 一九五五〜六三年
ライプツィッヒ大学で教壇に立つ。
- 一九六三年
『ソルブ民間文芸概説』(ソルブ民族研究協会論文集第三二巻、パウツェン、ドモヴィナ出版社) により大学教授資格取得。
- 一九六三〜六八年
ベルリン、フンボルト大学民俗学研究所教授。

一九八四年五月二四日

ライプツィヒにて死去（享年七五歳）

【追記】

パウル・ネドに関する資料に関しましては、ソルブ協会（パウツェン所在）のアネット・ブレザン氏にご協力を頂きました。また翻訳に際しましては、杉浦實氏にご教示頂きました。お二方のご好意に心よりお礼申しあげます。